慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号発行に当たって
Sub Title	
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.3 (2019.) ,p.i- iv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥野信太郎先生没後五十年記念特集号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329--002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥野信太郎先生没後五十年記念特集号発行に当たって

昨年（二〇一八年）は奥野信太郎先生の没後五十年にあたっており、慶應義塾中国文学会は七月の第三回研究発表会・定期大会において、慶應義塾大学文学部と三田文學会の共催を得て、「奥野信太郎を語る―没後五十年記念シンポジウム」を開催した。このシンポジウムでは奥野先生の教えを直接受けた最後の学生とも言える岡晴夫先生、中国文学研究で大きな業績を残した金文京氏、『三田文學』出身で幅広く活躍中の文芸評論家田中和生氏にご登壇いただき、関根の司会で進められた。またこのシンポジウムには慶應義塾大学文学部長の松浦良充氏から、文学部教授としての功績の高い奥野先生を顕彰するご挨拶があった。記念シンポジウムでは非常に熱心な討議が展開し、奥野先生の大きな人物像が様々な角度から生き生きと語られ、会場にお集まりの多くの方々からも積極的な参加があって、和やかな中にも非常に盛り上がった忘れられない会となった。慶應義塾の中国学の伝統を確かめ、今後の歩みの中に継承発展させていく上で、このシンポジウムの果たした役割はとても大きく、歴史的な会となったとも言えよう。ご協力いただいた皆様にこの場を借りて、深く感謝申し上げたい。なお、このシンポジウムの模様は『三田文學』二〇一八年秋号（一三五号）に詳しく掲載されているので、ぜひ参照されたい。

さて、奥野信太郎先生について、私たちの師村松暎先生は日本大百科全書（ニッポニカ、小学館）の項目執筆で次のように書かれている。

中国文学者、随筆家。東京の生まれ。陸軍軍人を父にもつ厳格な家庭に育ったが、陸軍士官学校をわざと落第、浅草オペラに入りびたるなどして、二一歳、慶応義塾大学文学部予科に入る。与謝野晶子（よさのあきこ）門下の歌人でもあった。一九四八年（昭和二三）より慶大教授。中国文学に独特の鋭い眼識をもっていたが、粋人肌

の彼は論文というやぼな形式を好まず、もっぱら随筆を書いた。『随筆北京（ペキン）』（一九四〇）、『柘榴（ざくろ）の庭』（一九五二）、『芸文おりおり草』（一九五八）その他多数がある。翻訳書としては『ちゃお・つう・ゆえ』（老舎作『趙子日』）など。［村松　暎］

恩師の紹介文で最初から「わざと落第」や「浅草オペラに入りびたる」などの言葉が踊るのは、さすがとしか言いようがないのだが、学会に身を置く者として「論文というやぼな形式」ときっぱりおっしゃられては、流石に身も蓋もない気もする。その一方で、まさにその通りだと感じてしまって、思わず苦笑してしまうのではあるが。私たちの世代は残念ながら奥野信太郎先生の謦咳に接したことはないのだが、この巨人は本当にそういう破天荒な方だったのだろうと思う。そして同時に、こういう粋な文章を日本の代表的な大百科事典に寄せる村松先生の、まさに先生らしい態度に深く納得してしまうのである。村松先生のあのやや高いトーンの口調が脳裏に響くのは、たぶん私だけではないだろう。ともかく、奥野信太郎という大きな存在をこのように見事に言い切った文章はない。

奥野信太郎先生は慶應義塾に中国文学研究の領域を確立した学祖である。その学問の領域は多岐にわたり、伝統的詩文、戯曲、言語学、民俗芸能から現代文学にまで及んでいる。のちに、「西の吉川（幸次郎）、東の奥野」と言われ、日本の中国文学研究の双璧と称されるのは、極めて当然だったというべきだろう。鋭敏な感覚と抜群の文章力は、次々に発表された随筆の名作によく表れており、現代文芸への深い洞察はその優れた翻訳が物語っている。特に、日中戦争期間に発表したエッセーや翻訳の文章は、中国の文芸への深い尊敬と中国に生きる人々への限りない愛情が溢れており、閉塞した排他的な時代状況に必死に立ち向かう気骨が強く感じられる。奥野信太郎先生は永井荷風（『三田文學』初代編集長）に憧れて慶應文学部にこられたのだが、学生時代から『三田文學』に寄稿しており、当時の編集を担当していた西脇順三郎先生や和木清三郎先生にその才能が早くから認められていた。また終戦後まもなく、『三田文學』編集長に就任し、水上瀧太郎先生らとともに、雑誌運営の中心的な存在としてその「戦後第一期」と言われる再出発を牽引していった。現在『三田文學』がこうして堅固な文芸活動を展開しているのは、まさに奥野信太郎先生のご尽力なしには考えられないことなのである。

戦後の慶應においては奥野信太郎先生の影響下に中国文学研究が目覚ましく進展して、慶應義塾はもとより、多くの大学・研究機関・教育機関の教壇に立たれるようになる研究者・教育者、そして国の内外の各界第一線で活躍する有為の人材を多数輩出するに至っている。また、日本における中国文学研究の最大の学会組織である「日本中国学会」は、奥野信太郎先生の時代に先生が中心となって慶應義塾三田キャンパスでの年度大会開催を実現したのであるが、それ以来半世紀にわたって、一度も慶應で開催されることはなかった。しかしこの度、奥野先生の孫弟子ともいうべき金文京氏が日本中国学会理事長に選出され、評議員にも慶應中文出身者が複数選出されるに及んでいる。私たちは先生にお会いしたことはなく、写真や映像でしか存じ上げないのではあるが、奥野信太郎先生はきっとにっこりと微笑まれていることと思う。

ところで昨年は奥野先生の没後五十年に当たると申し上げたが、その昨年の晩春、岡晴夫先生からたいへんな原稿をいただいた。表題「村松暎先生に訊く（インタビュアー岡晴夫）」、奥野信太郎先生について岡先生が村松先生に質問して答えてもらうという内容だったのだ。日付は「平成二年七月一六日」、岡先生はこの文章を掲載した雑誌を見つけて欲しいということだった。原稿はすでに誰かによってタイプされ綺麗にプリントアウトされており、しかもそこに数カ所、村松先生や岡先生の校正の跡も残っていた。どこかの雑誌に寄せた原稿であることは間違いなかった。早速読ませていただき、村松・岡両先生の自由奔放な話ぶりに魅せられながらも、その多彩な内容のあまりにも深い意義に驚いた。しかしそれにしても原稿のどこにも、掲載した雑誌の情報はおろか、校閲者の形跡などもまったく残っていなかった。すぐに思いついたのは、『三田評論』や『塾』、そして東アジア研究所の諸出版物で、関係部門の担当者と一緒に探したのだが見つからない。慶應義塾の塾員課の資料などにも足を伸ばして当たってみたのだが、やはり手がかりはなかった。こんなに大事な原稿なのに、どうやら結局刊行されなかったらしいのだ。その経緯はいまだに謎のままである。岡先生にご報告したところ、奥野先生の没後五十年という年にこういう原稿が見つかるというのは、たいへんに深い縁があるというべきで、なんとか発表しなければ申し訳がないということになった。私が編集長を務める『三田文學』ではすでにシンポジウムの共催とその座談会の模様の全文掲載を決めていたので、誌面的に余裕がないこともあって掲載不可能だったが、何よりもその内容からして最もふさわしいのは、奥野先生を学祖とするこの

「慶應義塾中国文学会報」であるのはあまりにも明白だった。いうまでもなく、その原稿が、本誌に掲載されているこの原稿なのだ。

この奥野信太郎先生を語るインタビューを読んでいくと、奥野先生から村松先生、そして岡先生につながる学統の脈々たる文芸の精神が軽妙洒脱な言葉のやり取りの中から浮かび上がってくる。この半世紀を優に超える時間の海には、藤田祐賢先生、佐藤一郎先生、川本邦衛先生など大先輩の営々たる教学の空間があった。時流に従うことを潔しとせず、あくまでも自由な個性を重んじる態度こそ、慶應の中国学の骨格なのだろうと思う。私たち後生の者たちは、それぞれの時間の中で三田に集い、こうした先生方の薫陶に浴してきた。思えば実に幸福な環境だったと深い感謝の念を禁じ得ない。

没後五十年、奥野信太郎先生の業績を、慶應義塾に誕生した中国文学会において記念する意義は非常に大きく、先生に対する顕彰を行うその時に立ち会うことのできる光栄に身が引き締まる思いがする次第である。奥野先生への限りない尊敬の念をもって、序文とさせていただく。

二〇一九年三月　慶應義塾中国文学会会長　関　根　　謙